

## 発掘調査の概要

### 檜隈寺の調査(飛鳥藤原第176次)

昨年度おこなった檜隈寺の調査(第172次調査)では、檜隈寺が位置する丘陵の頂部と南東麓に調査区を設け、前者では<sup>どうかん</sup>幢竿支柱の可能性が高い巨大な柱穴を、後者では<sup>すぼりみぞ</sup>素掘溝を確認していました。素掘溝は、出土した遺物から見て古代の溝と考えられました。今年度は、この素掘溝の延長が想定される部分を調査しました。

素掘溝は今回の調査でも検出され、南から北へ流れていたようです。素掘溝は、幅2.0m前後、深さ85cm以上という立派な規模であることが確認できました。水が流れた痕跡はあきらかではありませんが、増水時に水を丘陵裾側へ流すとみられる枝状に分かれる溝も確認できました。

素掘溝から出土した遺物には、6世紀末頃の土器に加えて、瓦片もありました。瓦片の多くには格子叩きと呼ばれる痕跡が確認でき、飛鳥で出土する瓦の中でも古い特徴を示しています。史跡に指定され、現地で見ることができる檜隈寺の遺構は、7世紀末頃の築造とされているので、この瓦片と素掘溝は、その前身になるとかねてより指摘されている寺院に関係しそうです。

檜隈寺の過去の調査では、同じ時期に推定される遺構や遺物がいくつか見つかり、今回の成果も加え、前身寺院の手掛かりが徐々に増えてきました。今回の素掘溝は、その寺域を示す溝の可能性もあり、後世の耕作で北への続きは残っていないようですが、南側は望みがあります。謎に包まれた檜隈寺前身寺院、その手掛かりを将来の調査に期待できそうです。

(都城発掘調査部 黒坂 貴裕)



素掘溝(南東から)